



教職課程だより

CONTENTS

1	教職課程を通じた教育活動と私の成長	6	教員採用試験合格体験記
	教職支援室／工学部 牧下英世		工学部 応用化学科 八代雛湖
2-3	介護等体験記		工学部 応用化学科 中村 都
	システム理工学部 数理科学科 岡部 咲		システム理工学部 数理科学科 和田萌乃通
	システム理工学部 環境システム学科 柳谷厚太	7	ボランティア体験のススメ
	工学部 応用化学科 長田理人		システム理工学部 数理科学科 木村舞里愛
	工学部 情報通信工学科 池延一輝		システム理工学部 数理科学科 阿萬皓平
4-5	教育実習体験記	8	第11回「教職課程同窓生の集い」を終えて
	システム理工学部 生命科学科 岩田ひかる		教職支援室／工学部 谷田川ルミ
	システム理工学部 数理科学科 太田翔馬		編集後記 教職支援室／工学部 岡田佳子
	工学部 情報工学科 谷津俊助		

教職課程を通じた教育活動と私の成長

教職支援室／工学部 牧下英世

私は、中学校・高等学校における数学教育の実践者として、教職課程に携わってきました。大学では、教育実習生の事前指導および事後指導を担当し、実習校への訪問や実習生への直接的な指導に取り組むことができました。この実践的な関わりを通じて、教育現場の課題や可能性を共有し、未来の教師である学生と共に成長する機会を得られたことを、大変嬉しく光栄に思います。

特に教育実習後の教職実践演習では、学校現場や学校外の専門家の方々の講演を通じて、教職におけるチームワークの重要性を学ぶことができました。教員一人ひとりが専門性を発揮するだけでなく、学校という組織全体で連携し、子どもたちを支える体制が必要であることを深く実感しました。この経験は、私自身の教育観を広げ、教育をより多角的な視点で捉える原動力となりました。

一方で、困難な場面もありました。しかし、いろいろな経験を通じて、自身の指導方法やコミュニケーションのあり方を深く見直す契機となりました。このような試練を乗り越える中で、人間関係の複雑さや多様性を知り、自らの教育実践にも良い影響を与えたと考えています。

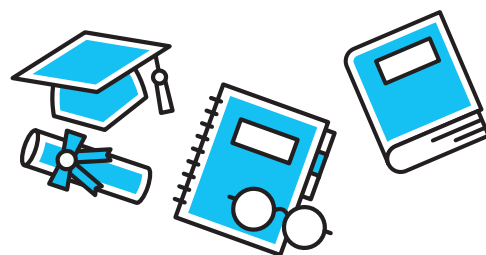
芝浦工業大学では教育実践者であるとともに、数学科教育学の研究室を主宰させていただきました。多くの学部生、修士課程の学生、博士後期課程の学生の研究指導に立ち会

う機会をいただきました。学生たちが学位を取得し、それぞれの道を切り開いていく姿を見届ける中で、私自身も教員として大きく成長することができました。研究指導を通じて得られた知見や学生たちからの刺激は、私の教育者としての資質を磨き続ける重要な糧となりました。

これまでの経験を振り返ると、教職や数学教育の分野で得た多くの出会いや学びに対して、感謝の念が尽きません。未来の教員を育てるという使命を胸に、今後も努力を重ねていきたいと考えています。教育とは、単に知識を伝えるだけでなく、人と人とのつながりを紡ぐ営みであることを肝に銘じたいと思います。

これからも、教育者としての役割を全うし、さらなる成長を目指して邁進していく所存です。これまでお世話になったすべての方々への感謝の気持ちを込めて、この文章を締めくらせていただきます。

ありがとうございました。



介護等体験記

特別支援 学校

システム理工学部 数理科学科 岡部 咲

私は埼玉県立上尾特別支援学校で、2日間の介護等体験を行いました。上尾特別支援学校は小学部、中学部、高等部に分かれており、学生は高等部の各学級に1～2人ずつ配属されました。1日目は革製品を生徒と一緒に作りながら、クラス全体を見る活動をしました。2日目は特定の生徒に付き添う形で授業に参加しました。

私が特別支援学校で驚いたことは、読み書きの出来具合が異なる生徒や支援の必要度が異なる生徒など、一見、同じ授業を受けることが難しいと感じる生徒が同じ学級に所属していたことです。私は特別支援学校に行くまで、同程度の支援を必要とする生徒が同じ学級に所属することが妥当であると思っていました。しかし、できることが異なるからこそ生徒間で「助ける」という行為が生まれているのだと気付きました。できないことはできる人が行い、できない人はできることを頑張る。この姿勢は個を大切にするうえで重要だと感じました。そして、助け合いで成り立っている学級は「ありがとう」が溢れる素敵な場所でした。

また、助ける側の生徒の存在も私に驚きを与えました。特別支援学校には、言葉がうまく出てこない生徒や、授業中に立ち歩いたりして落ち着きのない生徒がいる一方で、一見するとどのような障がいがあるのか分からない生徒もいるようでした。そのような生徒にとって、特別支援学校とはどのような場所なのか、どうすれば生徒それぞれの強みを生かせるようになるのかを、この介護等体験を通して考えるようになりました。

介護等体験を通して、支援を必要とする範囲は広いことを学びました。また、支援方法も生徒の数だけ存在し、日頃からの観察や声掛けがとても大切です。これは特別支援学校だけでなく、通常の学校でも言えることです。この2日間は、私を人間として成長させてくれた貴重な時間でした。



社会福祉 施設

システム理工学部 環境システム学科 柳谷厚太

私は埼玉県内の介護施設（グループホームとデイサービス、訪問介護事業を行っている認知症専門施設）で5日間介護等体験を行いました。体験時間は全日9時から16時となっており、施設の説明などのオリエンテーションは初日の体験時間内に実施していただきました。これまでに介護施設を訪問したことがほとんどなかったため、不安な気持ちを抱えたまま体験期間を迎えることになりました。一方で普段の学科の授業等では得ることのできない体験であるため積極的に体験ができれば良いなという思いもありました。

体験をして最初に気づいたのは職員の方々が入所者の方1人1人の性格の状態をよく理解し、介護が必要な場面と入所者の方自身にやっておいていただくことを適切に判断している点でした。主に認知症の方を受け入れている入居型の施設だったので生活していくうえで過度なサポートは避ける必要があります。職員の方は朝から入所者の方の健康観察、食事量や水分量などを細かく記録し、実際に会話してみて体調はどうかといった点を確かめていました。こういったことを続けていくことで入所者の方の信頼関係が生まれ、職員の方も入所者の方々に適切なサポートを行うことが可能になってるのだなと思いました。

2日目、3日目と体験を行っていくにつれて配膳のお手伝いや体を動かす運動を一緒に行うなど、入所者の方と関わる機会が増えてきました。すると初日に比べて入所者の方々が私のことを認識していただいているように感じ、とても嬉しく思いました。見覚えのある人として記憶して下さったようです。また私自身も入所者の方の状態をよく見てどういったコミュニケーションをとれば良いかをより深く考えるようになっていきました。最終日には私の特技であるウクレレの演奏を楽しんでいただき、短い期間でしたが入所者の方との関係も深まりました。

5日間を通して職員の方が大切にしていた入所者の方それぞれの観察、そして職員の方同士のチームワークは教員と似たようなスキルであると感じました。また私自身職員の方々が働く上での流れや入所者の方の距離感など実際の現場であるからこそ可能な貴重な体験ができ、理解が深まりました。

私はこの介護等体験で初めてデイサービス施設を訪れました。職員として業務をお手伝いするとともに、利用者の方々とレクリエーションやエクササイズを一緒にさせていただきました。実習を通じて高齢者の特徴

を把握し、様々な考え方や生き方を知ることができました。

実習から学んだのは、今を生きることの重要性です。80代から100歳越えの利用者は、戦争や戦後復興の経験者がほとんどでした。私は、戦時中の東京の暮らしや人々の写真をまとめた書籍を眺めておられた方にお話を伺いました。「幼少期は十分に食べ物無く、大豆の皮をふやかして小腹を満たしていた。当時は紙芝居にみんな集まり、寒くても外で集まって走り回って生き生きとしていた。今ほど娯楽はないが、もう一度子供のころに戻りたい」と仰っておりました。お話から授業より詳細な実情を学び、今日より不便でも希望を胸に生きていく強さや素晴らしさを感じ、私は励まされました。また私や親の年齢を聞いては、皆様は口を揃えて「まだまだ若い。これからだよ。」と応援してくださいました。自分や周りの人のため、社会のために頑張ろうという原動力を受け取りました。

私と同様に利用者の皆様はお話好きでした。挨拶として手を振ると喜ぶますし、たとえ声が出なくても、待っていたよと言わんばかりの表情を送ってくださいました。昨今のコロナ禍では会話の量が減り、アクリル板越しは寂しく、距離が遠く感じたそうです。ですから、人と人との仲を深めるのはやはり対面の会話なのだと思います。いつ体調を崩すかわからない。だから体が不自由でも健康なうちに友達とたくさん話し、好奇心を忘れずに新しいこと、できることをやろうとなったそうです。その活気に私は心が打たれ、幸せな人生に気付かされました。私の祖母もデイサービスを利用していたのですが、同じ気持ちを持って過ごしていたのではないかと考えました。

実習から、世代を超えた人とのつながりを意識できました。この経験がこれからの生活において、誰にでも優しく接し、助けようと動くための力になったと感じます。80歳差で交わした握手で頂いた「暖かい手だね」という言葉とエールを私は決して忘れません。



私は東京都立城東特別支援学校に2日間、介護等体験をさせていただきました。城東特別支援学校は小学部と中学部があり、知的障害のある児童・生徒のための特別支援学校です。私は今回の体験が始まるまで、特別支援学校という名前だけ知っている状態でした。ガイダンスで特別支援学校や様々な障害について具体例を交えながら聞いても、実際の現場を想像することができずに不安を感じていました。そして、ガイダンスで聞いた「細かい技術よりも、まずは1人の人間として子どもを理解し、コミュニケーションをとろうとする真摯な姿勢が大切です。」という言葉の意味を痛感するのは体験を通してでした。

2日間のうち、1日目は小学4年生の教室を見学させていただきました。私はほとんど児童と会話がができず、初めのうちは戸惑っていました。しかし、教員が児童に対して特別な接し方をしているわけではありませんでした。児童も言葉にはならないもののその呼びかけに声や行動で答えているところを見て、私も真似をして積極的に話しかけてみました。すると、児童からも話しかけようとしてくれることが増え、言葉だけでなく身振りや表情で意思疎通を少しだけ図ることができました。

2日目では中学1年生の教室を見学させていただきました。話すことが好きで私にずっと話しかけてくれた子がいたり、自分の世界に入り込んで楽しんでいたりする子がいて、私たちと何も変わらない様々な生徒がいることを感じました。そして、教員はその一人ひとりの特性を踏まえた上で接し方を少しずつ変えていました。教員の方は私に「この子に話しかけるときはこうすると良いよ」と、具体的なアドバイスをしていただきました。そして、その通り声をかけてみるとゆっくりですが生徒から反応が返ってきました。

私は今回の体験を通して、知的障害のある児童・生徒は会話の受け答えなど苦手なことが多いだけであって、我々と何も変わらない子供たちであることを理解することができました。障害のある人々との関わり方について、社会を生きていく中で苦手に寄り添いつつ普段通りに接していくことが重要だと感じました。





教育実習 体験記

私立中学・高等学校 理科

システム理工学部 生命科学科 岩田ひかる

私は3週間、母校の私立中学・高等学校で教育実習を行いました。実際に母校で実習を行った際に驚いたことは、自分が高校生だった頃とは違い全員がPCを所持し、課題を作成したり、調べ学習をしていたりしてICTの活用が進んでいたことです。また、教師の入れ替わりや制服が変わっていたことで雰囲気違っていてもあり、学校全体が4年間で大きく変化したように感じました。そのような環境の中、教育実習を3週間行い、多くの学びやもっとこうするべきであったという反省点があります。

私は中学1年生と高校2年生の理科を担当し、中高一貫校であったため幅広い学年と交流することができました。最近まで小学生だった中学1年生と受験を次年度に控える高校2年生の授業はクラスの雰囲気はもちろんのこと生徒の扱い方もかなり異なるため、生徒との関わり合いについてその学年の生徒にあったふれあい方を学ぶことができました。しかし、どちらの授業にも共通して、生徒が理解しやすいように難しい内容はなるべくかみ砕いて身近なものに例えるような工夫を心がけました。また、私が授業を行っていく中で、私の指導しやすい方法で自由に授業設計をさせてもらっていたことは様々な工夫を取り入れられた理由の1つであると考えています。そのため、授業では内容のイメージを掴んでもらうために動画を見せて説明するという形式をよく使っていました。このような授業の積み重ねで、最後の週では多くの生徒の前で授業を行うことに慣れることができました。

一方、私はホームルームのクラスの生徒たちとの交流にとても苦労しました。比較的おとなしい生徒が多く、なかなか打ち解けることができませんでした。毎日お弁当と一緒に食べていましたが、自分が思っていたよりも会話を発展させることができず、最後の日まで生徒たちと深い話ができなかったことはとても後悔しています。

この3週間は教職課程をとっている人にしか体験できない貴重な経験でした。実習前は不安なことが多いと思いますが、人生に一度しかない経験を後悔の無いように良い学びの場にしたいと思います。

公立高等学校 数学

システム理工学部 数理科学科 太田翔馬

私は母校の公立高等学校で3週間教育実習を行いました。担当教科は数学で、1年4組のクラスを担当しました。

1週目は授業見学が中心で、生徒や先生方とのコミュニケーションに重きを置いて過ごしました。私が学生時代に受けていた授業よりもICT機器が発展しており、生徒が飽きない取り組みや同時に生徒の理解度を計る取り組みなどとても学びやすい環境になっていると感じました。私はあらかじめ学習指導案や授業内容の計画を作成してから教育実習に臨んでいたため、授業見学以外の時間は授業改善に取り組みました。

教育実習の期間に体育祭が行われたため、積極的に朝練習に参加して生徒と打ち解けあうことができました。体育祭では生徒指導の観点

から先生方が裏側で厳しい指導をしているイメージでしたが、先生方は生徒よりも行事を楽しむという気持ちを持って参加し、生徒と一緒に喜び、悲しみという生徒の感情に共感しながら寄り添う姿勢に感動しました。生徒のことを誰よりも見てよく知り、裏側で生徒が思う存分に行事を楽しめるように動いていく姿に圧巻されました。

2週目からは実際に授業を担当し、担当クラスのHRまで行いました。授業をする上での最大の課題は「時間」でした。クラスごとに授業に対する理解度が違い、さらに日によってクラスの雰囲気次第で進度が変わる、繊細なものであると感じました。様々な先生の授業見学をさせていただきましたが、共通することは簡潔に端的に伝えることが上手であることでした。何が重要で何を学んでほしい授業であるのか、とても明確であると感じました。

私は授業見学と指導教員からのアドバイスから、「抑揚」を意識して授業をすることにしました。何度も同じことを説明し、授業を淡々と進めるのではなく、盛り上げる部分や授業をあえて止める部分などを追加することで、生徒が飽きずに授業に臨むことができます。これにより、重要事項を抑えながらも、授業を活発なものにすることができました。教師という仕事の生徒への影響の大きさと責任の重さを知り、教師は生徒の成長や体験と一緒に喜ぶことのできる素晴らしい職業であると気づくことができました。

公立中学校 数学

工学部 情報工学科 谷津俊助

私は3週間、母校の公立中学校で教育実習をさせていただきました。担当クラスは1年生を担当し、全学年の数学を担当しました。

教育実習を通して、教師のやりがいを感じました。特に学習指導では、教科書の内容を的確に分かりやすく伝えることの難しさを実感しました。生徒が理解すべき内容を生徒の目線に合わせて言語化し、適切な発問を行うことに苦労しましたが、授業を重ねるうちに、生徒の反応を予測しながら授業を組み立てる力が身につきました。また、生徒同士が意見を共有しながら気づきを得る対話的な授業の作り方も学びました。

生活指導では、部活動を通じて生徒が技術向上だけでなく、継続力や協調性を学びながら成長していることを実感しました。日々の練習を通じて、仲間と団結し、切磋琢磨する姿に、部活動が生徒の成長に大きな役割を果たしていると感じました。

学級指導では、授業時間以外でも生徒との関係を築く大切さを感じました。特に文化祭の準備では、意欲の差や意見の対立をどのようにまとめるかが課題となり、生徒の自主性を尊重しつつ協力を促すことの難しさを学びました。一人ひとりの考えを尊重しながらクラス全体のまとまりを作ることの重要性を実感しました。

研究授業では、授業の題材を考え、生徒に何を理解してもらうかを明確にすることの重要性を実感しました。入念に準備することで、生徒がより主体的に学べる授業を展開できることに気づきました。また、発問の工夫が授業の質を大きく左右することを再認識しました。生徒の学びを深めるためには、単に知識を伝えるだけでなく、生徒自身が考え、気づきを得る機会を作ることが大切だと感じました。

教育実習を通じて、授業以外の業務の多忙さを実感する一方で、生徒の成長を間近で見守れる教師という職業の魅力も強く感じました。日々成長する生徒たちの変化に気づき、支えることの大切さを学びました。また、教師として生徒一人ひとりに寄り添い、学びを支援することのやりがいを感じました。教育実習を通し、生徒だけでなく自分自身も大きく成長できます。生徒たちに向き合いながら、責任を持ち行動し、楽しんでほしいと思います。

教員採用試験 合格体験記

工学部 応用化学科 八代雛湖

私は2024年に東京都の私立の高等学校・化学の採用試験に合格することができました。ここでは私が合格までに取り込んだことや、実際のスケジュールなどをお話します。

まず、私は6月の教育実習を経て教員になることを決意しました。この時点で公立中高の採用試験は切は過ぎていたため、私立の学校に絞り採用試験を受けました。試験の内容は主に書類審査、模擬授業・筆記試験審査、教科面接、校長面接、(理事長面接)です。書類審査から内定通知までは1ヶ月弱ほどでした。

書類審査は、7月ごろから学校を探し始め、9～10月に提出を始めました。履歴書の他、学校指定の作文課題がある場合もありました。教師を目指す理由や理想の教師像、志望動機、ガクチカ、長所・短所についてなどの自己分析を行いました。これらを実際に文章に起こすことで教師になるための覚悟や自信につながっていました。初めは自信が持てず、キャリアサポの方や友人に相談しながら進めました。



模擬授業は、範囲が事前に指定される場合、自分で選ぶ学場合、当日に発表される場合があります。授業時間は10～20分程度で、指導案や板書案を作製し準備を重ねました。指導案や教科書、参考書類などは審査員分の枚数をコピーし持参しました。授業練習は、理科の教職の先生や友人に見ていただき、アドバイスをもらいながら改善していきました。

筆記試験は、中学範囲は高校入試用のテキストを、高校範囲はリードαを用いて対策しました。中学は問題だけでなく、その範囲の基礎知識もまとめてあるようなものをおすすめします(3冊ぐらい必要になり、範囲がかなり膨大になりますが…)。研究以外は全て勉強時間にあて、苦手分野から集中的に学習しました。

面接対策は、CASTを利用したり、教職の先生方に面接練習をお願いしました。苦手意識がありましたが、自己分析を重ねながら毎日練習をし、想定外の質問にも冷静に対応できるようになりました。

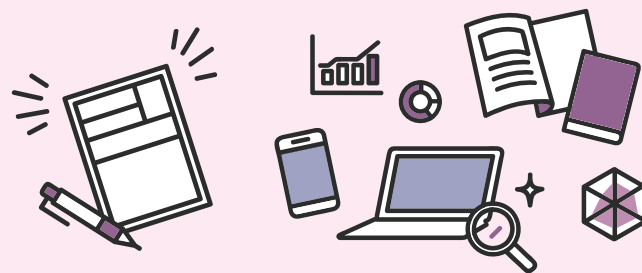
最後に、これまで支えてくださった教職課程の先生、キャリアサポート課の方々に深く感謝申し上げます。今後は生徒に寄り添い、自信を育み、挑戦を後押しできるような教師を目指して頑張ります。

工学部 応用化学科 中村 都

私は令和7年度東京都公立学校教員採用候補者選考を受け、合格をいただくことができました。合格までの道のりをご紹介します。

私は大学3年の冬に東京都の選考を受けることを決めました。民間企業のインターンシップ等にも参加しましたが、やはり理科教育を通じて未来の技術者を育てたい、東京で働きたいという思いが決め手となりました。

しかし、受験を決めたのは良いものの、試験や研究室配属でバタバタしていたため本格的に勉強を開始したのは2月頃でした。また、3月には留学も重なっていたためまとまった勉強時間を確保できず、隙間時間での勉強を続けることになりました。選考は1次選考で筆記試験(教職教養・専門教養・小論文)、2次選考で個人面接という内容だったため、まずは筆記試験の対策を行いました。教職教養は問題集1冊とYouTube動画、過去問を教材とし、ひたすら解く→間違えた部分の知識をまとめる、といったサイクルで取り組みました。専門教養は全国の自治体の過去問と高校生向けの化学の参考書を教材とし、同じように取り組みました。小論文対策は、教育時事問題の書籍を図書館で借りて読んでいました。



教員採用試験 合格体験記

4年生になってからは、研究活動と試験対策の両立を意識して取り組みました。6月に教育実習、7月に1次選考と過密なスケジュールだったためその期間は研究活動を休ませていただきました。1次選考の後に研究の中間発表があり、非常に忙しい日々を過ごしたためこの頃の記憶がありません。

幸い1次選考を通過したため、8月は2次選考の対策を行いました。授業でお世話になった教職課程の先生、キャリアサポート課の教職担当の先生にお時間をいただき、たくさん面接練習を行いました。先生方が親身に対応してくださったので心強かったです。

だいぶ短期決戦の受験ではありましたが、9月末に合格をいただくことができました。教職課程の先生方、キャリアサポート課の先生をはじめ、研究室の先生や先輩、同期や教職課程の友人、家族など多くの方々を支えていただいたおかげです。心から感謝申し上げます。この気持ちを大切に、これからは夢に向かって頑張る生徒を応援できる教員になりたいと思います。



システム理工学部 数理科学科 和田萌乃遥

私は、埼玉県私立中高一貫校の数学科教員として内定をいただきました。ここでは、私が私学に内定をいただけるまでに取り組んだことをお話しします。

私が教員を目指すことを決めたのは、4年生の春です。元々企業への就職を目指していたため、4年生の春休みまでは就職活動を行っていました。しかし、就職活動をしていく中で自分が本当にやりたいことは何かを考えることが何度もありました。再度自分自身と向き合って考えた結果、教員として生徒の成長を近くで見守り、支えたいと思いました。私が私学を選んだ理由は、生徒の個性を大切にする学校で働きたかったからです。私学にはそれぞれ学校の特色があります。その中で自分に合う学校を選ぶことが大切です。私が就職する学校は生徒一人一人の個性を尊重し、日本一楽しい学校を目指しています。その思いに共感し、この学校を選びました。

私学の採用試験は学校によって様々です。専門科目の筆記試験や面接、模擬授業、グループディスカッションなどがありました。そのため、自分が受ける学校の採用情報を必ず確認して対策することが大切です。特に多かった試験内容は面接と模擬授業です。面接では「なぜ教員を目指したのか」や「なぜこの学校を選んだのか」や「どんな教員になりたいのか」などを聞かれました。志望理由を明確にさせ、将来を見据えることを意識して面接対策を行ってください。模擬授業では事前に内容が決められている場合や内容が自由な場合、その場で伝えられ少し準備時間を与えられる場合などがありました。大学の授業や教育実習での経験を活かし、志望する学校の生徒を想像しながら練習することが大切です。事前に学校のホームページを見て生徒の雰囲気把握しておくこともいいと思います。

今後教員を目指す方にとって、一番大切なのは将来自分が何をやりたいのかを明確にすることです。それを踏まえて公立もしくは私学の道を決めていただきたいと思います。

最後に、これまで教職課程の先生方をはじめ、多くの方々へ支援をいただき内定をいただけました。この場をお借りして御礼申し上げます。これからも生徒と共に日々成長し続ける教員を目指していきたいです。



ボランティア体験のススメ

システム理工学部 数理科学科 木村舞里愛

私は、入学すると間もなく、教職担当の先生の勧めで、さいたま市の学習ボランティアに登録しました。そして、市内の中学校でチャレンジスクールという活動に一年間を通して参加しました。活動内容は生徒に勉強を教えたり、生徒と一緒に花文字教室や音楽教室などの体験教室に参加したり、漢検、数検などの試験監督やテスト対策を行うというものでした。

これらの活動を通して、私は多くのことを学びました。まず、スタッフは地域の方々、元学校の先生、社会人の方、他大学の学生など職業や年齢も様々で、同じ大学生でも教育学部などの文系の学生、理工学部の学生など、専門が違ってきます。色々な人とコミュニケーションを行う中で、「人とのかかわり方」を学ぶことができました。また、人に物事を教えるためには、教える内容を私自身しっかりと理解していなくてはならないということ、さらに、時には専門的な知識だけでなく幅広い知識が必要になることも実感しました。例えば生徒から、自分の得意な理系科目だけではなく、国語や社会などの文系科目を聞かれることもあります。検定の対策では、中学生では難しいと思われる級以上の質問をしてくる生徒もいます。「常に私自身、学ぶ意識をもって知識を広く持つことも大切」と学びました。また、生徒によっては学力の差があるため「教え方に工夫が必要」であることも学びました。

学習ボランティアでは、様々なバックグラウンドや考え方を持つ人々と一緒に活動することで私自身の視野が広がり、常に学ぶ意識をもって行動することで自己の成長にもつながります。何か問題点があれば気づいて対策するなど、これからの社会で生きていくために必要な多くのことを学べた貴重な体験だったと思います。

今後もこの活動には継続して参加していきたいと考えています。

システム理工学部 数理科学科 阿萬皓平

私は2023年12月からさいたま市立島小学校で小学生に対して勉強を教える「島小チャレンジスクール」のボランティア活動に参加しています。私がこの活動を始めたきっかけは、ただ子どもが好きで一緒に過ごしたいという単純な理由でした。しかし約1年間この活動を続けてきて、たくさんの経験を得られ、とても有意義な活動だと思っています。

この島小チャレンジスクールでは、勉強を行う時間と様々な遊びを体験する時間があり、私は勉強を教える「学習アドバイザー」という立場でこの活動に携わっています。この活動に来る児童たちは学習の習熟度が様々であるため、一人ひとりに違うアプローチの仕方をしながら勉強を教えることが求められています。そしてもちろん、それぞれに違った個性を持つ子どもたちであるため、勉強以外の部分でのコミュニケーションの取り方も変わってきます。その中で、子どもたちに「伝える」ことの難しさを感じました。

私はこの活動を始めるまで教育する側に立った経験は一度もなく、子どもたちにどう接していくことが正しいのかも分からず、伝えたいことが伝わらないことも多くありました。こういった部分を改善していくために私は普段より言葉を慎重に選びながら会話をし、子どもたちが今どんな感情なのか、何を思っているのかを常に考えるように意識しました。その結果、主観的には子どもたちがうなずいてくれることが増えたように感じます。

そして、何より子どもたちからエネルギーや新しい物の見方を得られることが、この活動を続けている一番の理由になっています。チャレンジスクールの中で作成した作品を自慢げに見せてきてくれることや、「学校でこんなことをしたんだ!」と話をしてくれる時がこの活動をやっていて良かったなと感じられる瞬間です。皆さんにも、このような経験が得られる「ボランティア体験」を強くお勧めしたいです。



2024年12月7日(土)に教職同窓生の集いを開催いたしました。11回目となる今回は、初めて豊洲キャンパスで実施いたしました。オンラインでの参加も呼び掛けて、ハイブリッド形式で行い、卒業生12名、在学生11名(うちオンライン5名)の参加がありました。

今回のテーマは「教員の多様なキャリア」ということで、教員になるまでに教職大学院、臨時採用、一般企業勤務など、多様な経験をされた方をお呼びしてお話を伺いました。会のはじめに、システム理工学部教職担当の奥田宏志先生より、開会の挨拶があり、その後、3名の同窓生の先生方から、座談会形式で、教員になるまでのキャリアや教員を目指した動機、現在の仕事の様子について、お話を伺いました。

ご登壇いただいた先生方は、金子誠先生(2003年度工学部土木工学科卒、芝浦工業大学附属中学高等学校教諭・数学)、清水雄太先生(2017年度システム理工学部数理科学科卒、群馬県太田市立小学校教諭・数学)、赤塚久俊先生(2021年度システム理工学部数理科学科卒、埼玉県和光市立中学校教諭・数学)で、いずれの先生も一般企業への勤務、臨時採用教員としての勤務、教職大学院への進学などを経験したうえで、教員への道を選択した方々です。

先生方のお話からは、どのような進路を選択したとしても、教員への道は閉ざされたわけではなく、「教員になりたい」という意思を持って行動することで、教員への道につながるということを学ぶことができました。また、現在の教員としての仕事につい

て、3人の先生方に共通するご意見として、「忙しいけど楽しい」というものがありました。これは、教師を目指したいけど、勤務の状況が気になるという在学生たちにとって、とても参考になるお話だったのではないかと思います。

会の最後には、工学部教職担当の岡田佳子先生より、3名の登壇者の先生方と参加してくださった方々への感謝の言葉をいただき、閉会となりました。閉会後も、同窓生同士で情報交換したり、現役生が登壇者の先生方に質問をしたりする姿も見られ、良い交流の機会になったと思います。

卒業してから、初めて豊洲キャンパスを訪れた同窓生の方からは、豊洲キャンパスの新校舎の様子に驚きの声も挙がっておりました。教職課程の同窓生たちが、年に1度、母校へ戻って、同志と交流する機会として、この集いを継続していきたいと思います。



編集 後記

2024年度の「教職課程だより」をお届けします。2025年3月に定年退職されます牧下英世先生に巻頭言をご執筆いただきました。「教育とは、単に知識を伝えるだけでなく、人と人とのつながりを紡ぐ営みである」との牧下先生のお言葉は先生のお人柄と教育への思いが凝縮されたものであると感じました。

介護等体験記を学部生4名に寄稿してもらいました。コロナで代替措置となっていた介護等体験が今年度から完全に復活しました。皆さんが大変素晴らしい体験をさせていただいたことが伝わってきました。さらに、教育実習体験記を3名に、教員採用試験合格体験記を3名に、ボランティア体験記を2名に寄稿してもらいました。谷田川ルミ先生から

は12月7日に開催されました「教職課程同窓生の集い」の報告をいただきました。今回は初の豊洲開催となりましたが、教職課程で学んだ多くのOB・OGと現在教職課程で学んでいる在学生に参加していただき、よい交流の場となっていると感じました。毎年こうして集まることのできることを我々もとても嬉しく思います。

この教職課程だよりを通じて、本誌をお読みいただいた教職員の皆様や、教職を履修していない他の学生さんたちにも教職課程の様子が少しでも伝わったら嬉しく思います。今後も教職課程および教職を履修する学生についてご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

(教職支援室／工学部 岡田佳子)